

## 相沢さんよりの手紙

相沢 尚夫

冠省。このような手紙を書くことを、心から遺憾に思  
い、幾度かためらいましたが、日本無政府共産党の同志  
として弾圧の嵐の吹き荒れたなかで、当時の次第にたか  
まってきたファッシズムの軍靴の音のなりひびくなかで  
この反動的動向に対して戦を挑んだ勇敢な同志諸君の名  
誉のためにも、この手紙は書くべきだと信じて筆をと  
りました。

貴台が編集兼発行者である無政府主義誌「リベルテ  
ル」八月号（昭和五〇年八月十五日発行）に特別寄稿と  
して江西一三署名の無政府共産党事件をめぐって——自  
協側からの白井との対談——と題する対談記のなかの二  
八頁上段に次の通り記されている個所についてです。

「……逸見の吉っちゃんのいうように相沢は青共キャ  
ップの小西知円というお寺の息子に操やつられていたの  
か、その点の確認はよくつかめないが、これについての  
特高資料がどこにあると吉っちゃんは言っていたが。  
……」

白井自身確認なしと言っていること、つまりデマであ  
るかもしれないと述べていることを、確認せずに掲載し

たものではないかということ。貴台がこの疑わしいと言  
っている話を信じて敢て削除しなかったのか、どうか責  
任ある回答を伺いたいと思うのです。これは重大なこと  
と思います。この話は白井と江西がお茶飲み話をしたの  
ならとやかく言いませんが、無政府主義誌と称している  
「リベルテール」にのせられたということが重大なこと  
なのです。

はっきり言いますが、私は小西知円なる人物を全く知  
りませんから会ったこともありません。その名前も、こ  
れを読んで初めて知ったことを明言します。そしてそ  
んな特高資料があるなら見たいと思っています。当時、  
私は青共とは何の連絡もありませんでしたし、交渉のあ  
ったのはアナキストばかりでした。それ故これは日本無  
政府共産党を誹謗するために考え出したデマとしか言え  
ません。このデマは私が青共に操られたとしたことは、  
党文書は私が書いたものですから、党そのものが青共に  
操られたということになりかねません。そうなると三〇  
年代のアナキズム運動への党の影響はある程度はいつて  
いたし、アナキズム運動の主動的な活動家の多くは黨員  
か党の影響にあった人達でしたから、この運動が青共に  
操られた運動となり、ひいては日本のアナキズム運動を  
極めて自信のない、自主性のない運動としておとしめる

こととなると考えます。それ故私は重大だと言うのです。  
このデマは白井によると逸見から出たそうですが、の  
ちに述べる日労のバクロ事件でも逸見と佐竹がやったこ  
とですから、これで二回私は逸見吉三の怪しげな発言に  
迷惑しました。

このようなデマを飛ばさずにおられない心理を私なりに  
考えますと、白井自身の言葉が、江西の文章の最後に  
ありました。ハ斗うプロレタリアは地に潜って変節しな  
いVというところ。つまりあの嵐の時代に、身の安  
全のために戦線から脱落したために、その脱落が総ての  
アナキストであつたなら、脱落者の心は安じておられる  
のに小敵ながらも嵐に抗って戦っていたアナキストがい  
たとなつては、心理的な後めたさをどうしようもなく、  
自分の戦線からの脱落を何とか合理化したくなるのは、  
あり得ることと思えます。嵐に立ち向つた人達が日本無  
政府共産党を組織したのですから、この党を何とか誹謗  
しおとしめたいと思うでしょう。それがデマを飛ばした  
秘密としか思えません。私は党への思想的、理論的批判  
は喜んで受けます。それが前進のためならばです。

次は日労のバクロ事件です。これは内容が書いてない  
のですから、ついでお話することですがご迷惑でしょ  
うが、お聞き下さい。十八頁上段の「逸見、佐竹君らの

暴露斗争……」云々です。この件は発頭人の佐竹が死  
んでしまったので、今日まで誰にも言いませんでしたが、  
暴露事件の内容を明らかにしておく方がいいと思いまし  
たので書くことにしたのでした。

暴露の内容は、日労が、配給された機関紙用の紙を他  
の業者に販売して（当時はヤミ売りです）その金で組合  
運営をしていたほど日労は外部発表と内容とがちがって  
いて、私が書記長としての位置を守るためにその金を流  
用しているというものでした。配給された紙を業者に売  
ったことは事実です。しかしその金を誰が何に使ったとい  
うことも事実です。しかしその金を誰が何に使ったとい  
うことは一言も触れていないのです。それはできないこと  
だったのでした。配給された紙を業者に売ることで機関紙  
の発行費と機関紙部の活動費をつくろうと提案したのは  
機関紙部長の佐竹でした。彼は業者と相談の上提案して  
来たのでした。その業者とは、競馬新聞の会社の経営者  
白井新平でした。私は白井を同志と思っていたのである  
いは思い誤っていたと言う方が適切かもしれませんが、  
とにかく同意し、これは佐竹と私の二人だけのことに  
しておこうと決めました。私が白井の会社へ佐竹と会い  
に行つて値段のとりきめをしたのです。その時白井は紙  
さえあれば、もっと売れて儲かるのに紙がなくて沢山刷

れないと言っていました。こうして機関紙発行費と佐竹の生活費ができたのでした。日労会議は専従役員に給料が払えるほど財政的に充実していませんでしたので機関紙部長への給料もそれまでは払っていないで、彼は他の組合の専従書記を兼ねて、そこから給料をとっていました。それ以来機関紙部長一本でやっていけるようになったのです。これが紙を売った金の使途でした。私は、と言うと会社の給料があったのです。当時はこれが許されている時代でした。

総評結成の動きがはじまり、われわれも全組合をあげて総評に加わり、発展的に解消しようということになった頃、私が戦線統一のために総評結成を主張し出した頃佐竹は反対を唱えました。その頃私の私信で、総評へ加われば、自分のポストがなく、メシの種がなくなるがそれはヒドイじゃないかと言って来ましたが、私は彼が労働組合をメシの種、つまり喰いものにしていては考えがたくなかったのです。総評書記に入れるよう努力するがそのためには東京へ出て来ないとまずいと返事したことをおぼえています。その返事があったかどうか忘れましたが、その回答が暴露事件でした。私だけが総評へはいるとでもヒガンだのかもしれない。とにかく自分が言いだしただけの種に責任者の私を攻撃したのでし

たから話にもなりません。これは卑劣な裏切り行為だと思いますので、私は「彼と彼の娘のために私はできるだけのことはした心算なのに何故二人だけのことにしようという約束を破ったのか」と抗議の手紙を出しましたが彼は返事をくれませんでした。組合は暴露の真相を調査し、機関紙発行の為に言えやミ売りは遺憾だったと共に、暴露事件は佐竹の私的裏切りと認めて終ったのです。私はこの事件で組合から離れ、失職し貧乏のどん底へおちました。アナキズムは正しいと信じてながらも、アナキストのうちには、他の思想の人間のなかにもいるような卑劣な人間もいることを思い知らされましたので、一人の人達を除いては殆んど交友を断って生命保険の勧誘員になったのです。それでも私は組合運動をしていたのでした。

私はこのようなデマ記事が貴台編集の「リベルテール」にのったことを本当に残念に思っています。デマを掲載することによって、貴台が卑劣なデマの同調者と思われることを非常に残念に思えてなりません。とにかく三〇年代のアナキズム運動は青共などに操られるほど貧寒としたものではなかったことを知って欲しいと思います。編集発行人としての貴台の責任ある回答を待っています。文中失礼な点がありましたらお許し下さい。

## 「日本無政府共産党」をめぐるひとつの釈明

三浦 精一

私信の形だが九月二十一日付で、相沢尚夫君から別掲の抗議の手紙が来た。これはリベルテールの第六巻第八号にのせた江西一三君の署名での無政府共産党事件をめぐって一自協側からの白井との対談の中に事実と相違するものがあるとしての釈明であるとともに、リベルテールが事の真実性をきわめずに掲載したことに對する抗議でもある。

釈明は釈明として読者諸君の判断に委せることにして釈明のまた釈明や抗議になつては泥試合にもなりかねないから、これ以上リベルテールではとり上げない。

ここで、「編集発行人として」の僕の回答が要求されているので、それについて少しばかり書くことにする。

唯我独尊、またはわが仏尊としといったことが一般的であるこの人間の社会で、「真実」あるいは「誤謬」ということは一体何なのだと僕はいつも考えている。リベルテールはアナキズムの真実を追求しようとしている。追求の過程に誤謬も入りこむことは「間違つてこそ人間」である以上仕方がない。純粋なもの、間違いのな

いものは「神」以外にはない。こう僕が言うのは、白井、江西の対談の真実性について、僕自身、ある程度しか分つてはいないからだ。真実を追及する学術雑誌でも、それを追及した上でいつたら存在出来ないものになる。データによってのみ歴史は書かれねばならないとしたら歴史の書ける人間は存在しない。データの真実性はそれを抜かう人間の主観に左右される。

僕がああ白井、江西の対談をのせた理由は別なのだ。僕はアナキズムの真実の追及にあたって、僕自身を定位置させていることは、「人間そのものの探究」ということである。この生物としての人間が、肉体と精神の複雑交錯する中で、この地上の生をいとなみ続けるために、いかにあつたか。そして、いかに在り、いかにあるべきかを考えるのだ。アナキズムはこのいかにあるべきかに大きく関わりをもつと考える。そしてアナキストと称している。人がそう思ってくれようと、否にかかわりなく、そう称して自由、平等、友愛という昔ながらの原則をふりかざし、そして暴力を否定している。暴力がどこまで否定できるかは、又別の問題だ。

こうした僕は過去の日本無政府共産党についてはアナキストたちの過誤として、それが歴史の一コマとして考えている。その中央集権主義、同志の射殺、婦人を売

思うからだ。

## 余分な回答

山本 二夫

りとばしたことなく、忠臣蔵からの距離を考える。もちろん、あの酷しい弾圧の下での心理的な動きというものも考えている。そうした苛烈な条件下で現われる日本人の伝統的な、ものを考えるのだ。

しかし革命後の社会を考える時、それがアナキストのエリートが支配する社会ではないし、アナキストとともにスパイも泥棒も権力主義者も共存する社会であろう。それでも肅清はないはずだ。こうした社会をつらぬくものとして、アナキストの持つべきものは一体何なのか。前月号の巻頭言で触れようとしたのはこの点であった。

こうした考え方をもち僕は、過去の日本無政府共産党の在り方は、単なる歴史の一コマ、またアナキストの過誤としてでなく、正統性をもつべきではないと思っている。あの白井、江西の対談の中に、日本無政府共産党に対する批判的なものを含んでいる点を取り上げたのだった。

相沢君の私信を発表するについても、日労関係のことは、資料として貴重だと重視しているが、これも相沢君が真実として書いているので、僕にはその真実性は、その場に立会っていた訳ではなし、分っちゃいない。リベルテールに出したのは、資料として考えねばならないと

僕は人事に関することはあまり好きでない。それはややもすれば派閥様のものの形成をうながしたり、口ぎたなく互いののしりあったりするからなのだ。しかし人間界の、しかも人間の行動をうつそうとするならば、人事に関することはさけがたく立ちいたってくださるだろう。相沢さんより「無政府共産党が青共の影響下にあったらしい」という白井さんの判断に対し、このたび別頁のごとき手紙がきた。その判断に対する反論と日労末期の暴露事件に関する説明を中心としたものだが、その手紙を見て僕が感じたことは何でこういう書き方をするのかということだ。

僕は対談の原稿を、もと自協側の一部の人の無政府共産党に対する見方としてリベルテールに掲載するのに反対しなかった。それを青共の影響下にあったというデマを調べもしないで掲載した、と言ひ、リベルテールに対する節度ある非難をしながらも、なぜ白井、江西両氏をかくもへんに非難するのであろうか。これでは欲せざして、リベルテールはのしりあいの場になってしまう。

## 野火

ぐずら・だより 2, Okc. 75.

ストックホルムから“Liberation Light”（自由人の絆）の購読料について返辞が来たのでさっそくお知らせします。

“L.L.”の購読料は決められています。各自がその能力に応じて費用を支出しあうことになっています。そこで“L.L.”誌上の出費の報告を見ると、たいがい一年に四〜五ドル（二〇スウェーデンクローネ）ぐらい出資しているようです。日本円に直すと一クローネ七〇円弱なので一五〇〇円ぐらいになると思います。すでに“L.L.”を受け取っている人、また、これから申し込む人はこれを目安にして送金して下さい。日本での取次は福岡の鶴木さんがしていますので、そちらの郵便口座に、日本字とローマ字で住所氏名を書いて払い込んで下さい。ローマ字書きは、ストックホルムからの発送名簿用にするものです。“L.L.”はストックホルムから船便で直接あなたの手もとにとどけられます。

すでに送付を受けている人で、住所や名前にまちがいがあったらお知らせ下さい。こちらから送った名簿にだいたい誤りがあったようですので。

この手紙を載せるのには躊躇を感じるが、あまりの不適当な部分を除いて大部分を載せる。一度、僕の判断で某氏の悪罵の部分を削った所「それは大事な所だ」と言われ、僕が悪罵と判断した判断を非難されたことがあるが、悪罵、もしくはそれに類似するもの、不要のものは削るようにしているので了解して欲しい。

三浦さんから釈明が出されているが、僕も又、編集にたずさわった者として回答したい。僕は江西、白井両氏の対談を当時を知る二人の見方として反対しなかったのである。「推定と推定による断定」の回答は三浦さんがしていると思う。

最後に余分かもしれないが、対談は三浦さんもいっているように資料となるかもしれないが、資料として載せたのではない。更にこれらの対談、手紙、釈明等に対し、事実に対する、こうでもあった、という事項があるのなら、一方的排除はしない。自由を愛するものなら相手の自由を束縛するようなことはさけるだろうし、又、相手の自由を侵すことは気をつけるだろう。自らが持つ理想のため（不満の爆発でもよいが）これからもしどしどし原稿を送って欲しい。

相沢さんに。迷惑をおかけしたとするならばお詫びいたします。又、当時の無政府共産党に関係した人々にも。



読みたくないから送ってくれるな、という連絡も。直接ストックホルムへ、受け取った旨のあいさつ状を送ってもらえると一番うれしい。

□座番号：福岡 一八〇〇七番 鶴木敬憲

住所：福岡県京都郡荏田町南原

申し込みはひろせしんじ：小金井市本町四一六一六四五でも受け付けます。

あつちの状の送り先はK-do P. Persson:

Svariviksvagen 14,

S-12352 FARSTA, Svedio.

はがきの航空便で五五円です。

|                                                                                                                           |    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| Estimata K-do<br>Mi vicevis vian<br>gazelon "L.L."<br>Mi goje abonas gin<br>Mi sendas monon pen<br>K-do Unoki<br>tute via | 55 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|

はがきの例

~~~~~  
平井貞二さんより

病床にあるため何事も不自由勝で皆さんに御無沙汰して居ますが何卒お許しを乞う。

いつか白井新平君が「ながれ」の中で写真一葉いれていましたかその中に貴兄のお顔も拝見したようで引続き御健闘を祈ります。

僕も七〇才。和田久、朴烈君らとムシヨに同房して以来感無量です。

大阪に帰って以来ほとんど「農青」グループで動いていたので、江西君の相沢、二見観は宮崎のものと大体同感。

~~~~~

ヤマト・アキさんより投書があった。要旨は坂入君の「アナキズム経済学」につき同君のアプローチの仕方が抽象的にすぎる。アナキーの経済学は商品経済の否定で、「権力を否定し、平等を追求する消費権をどう組み立てるか：アナ経済学はものの消費権のあり方」ではないかと疑問を投げている。生産を重視するのがマルで消費を注視するのがクロだとする思考パターンはここで一度解体して根本的に解明する要があるだろう。坂入君は方法論を提起しているのであって、一つの思考過程を示しているのだ。

## 海外だより

一有志より「七〇年代戦線」グループから彼らの機関紙を届ける様云われました」と添状をつけて Minus 9 とハ七〇年代V<sup>No.31</sup>が送られてきた。香港の APPS (The Alternative Press Syndicate) の代替出版組合V発行の第一号で本年から起算してマイナス9年に当る一九八四年を〇年とする英文小冊誌だ。主張は興隆する世代の活動、政治社会現況を提示して失われ行く地球に対し代替を創出するにある。日本の CIA に関する記事など情報紙の役割を勤めている。一部五〇〇のハ七〇年代Vは中文で発行所は紅黒書店、ここはまたエマ、クロ、バクニンの著書を販売している。内容は詩、散文、論説記事等多彩で、中国本土の知られざる情報がアナキズムの立場から記述されて居り好感がもてる。数字に拠って本質を見るVでは香港の現状が記され「一九七〇年の輸出額は世界第十八位、世界十大貿易国に比肩する」ところが民生で言えば「まず便所が足りない。卅数万の木造家屋に住む人のうち廿一万人が共同便所を使用している。政府の規定では百人に一箇所の筈だからこれがどんなに不便であることか：水道もそうだ。五百家屋に一つが規定なのに大厦高樓でも僅か二個の蛇口しか

ない：百軒の内六十一軒は居間と客間が兼用で台所だけ、

百軒の内廿三軒は一間の部屋だけ、九竜では十五呎×卅五呎の建物に実に五〇人が居住している。平均一人宛の空間は十点五、六呎だからこれは五呎×二、一呎で棺桶の広さぐらいだ」と言う。日本人として香港旅行を楽しむ時、現地の生活者の苦勞を知るのも有益であろう。中国労働運動の近報Vでは杭州に約一万名の軍隊が派遣された事件を取上げている。「毛沢東と党中央委員会は最近浙江省の労働問題に就き重要な指示をだした後、彼地に軍隊を派遣し杭州市十三間工廠に行かせた。：省军区の新司令を選出し、同時に杭州第一及び第二党書記を更迭。公報では（反革命修正主義路線と資産階級系の害毒により、敵対的小グループの破壊活動があり、杭州労働者の生産量は高くなく、因って軍隊派遣の要があった）としている。これを起爆剤としてどのように情勢が移るか判らないが、中共官僚群の動きによって労働者の不穏もどの程度になるか警戒を要す」とある。

楽しくて物悲しいのは歌曲だ。文化革命以後、数々の替歌が作られ、ハ諷刺と自嘲的意味Vをこめて歌われているそう。その一つ。

偉大な領袖が号令された

知識青年は山から降りて田舎へ行こう

## 声 明

9月27日に行なわれた「バスク独立と自由」(ETA)および「反ファシスト革命愛国戦線」(FRAP)の人々の処刑に対し強く抗議します。

私達は自由を愛し平等を願うリベルテールとして、政府の強権的暴力を承認することができません。

今回の5名の人々に対する処刑は正義を実現しようとする人類の意志への裏切りであり、その善性に対する反逆です。

私達は今回処刑された人々が政府の言うような凶悪な犯罪者とは認めません。この処刑は国家的な国民に対する強迫として敢行され、人々を恐怖と威圧によって屈服させるものです。

私達はスペインで行なわれた5名の処刑を悲しみと共に憤り、関係者各位に私達の抗議の意志を表明します。

リベルテールの会

吉 葉 雅 俊

江 藤 敏 和

はしもと・よしはる

三 浦 精 一

教育を再び受けよ  
それこそとても大切な  
青年は言われた通りやらねばならぬ  
アイヨ、おっ母さん、元気を出して  
アイヨ、おっ母さん、元気を出して  
あなたにほくの苦しみを  
話しに行くんじゃないんだから。  
農村では「訴苦会」という行事が盛んで、旧社会の悪  
事を話すそうである。  
その二つ。(再見吧、広州)  
岸辺の榕樹は頭をたれて語らない  
珠江の流れは咽鳴おえのようにだ  
私は長い堤路をさまよう  
話したいけど話せない  
さようなら、広州  
さようなら、娘さん  
明日のわが身は流れと同じ  
遠い地方に向って走る。  
.....  
.....  
.....  
なおIWW訪問記もある。いずれにせよ、中国の一角  
から奔出する紅黒い炎に注目しよう。  
紅黒書店 灣仔洛克道180号2楼 香港

## 編集後記

☆「リベルテール読者の会」が無事に終った。問題点が  
かなり露呈され、その対症法について公開の場で論議さ  
れたのは、三浦さんの言う通り喜ばしいことだった。最  
近はお蔭様で読者の生まの声、掲載文についての反論等  
寄せられるようになった。雑誌作りはむづかしい。読者  
のどの層に宛てて作るか。などはコンピュータに委せ  
私としてはアナキズムでやろうとしている人びとに、  
現在のな問題点、思考方法などを明らかにしていきたい。  
それに感性のあり方など。リベルテールは老年、中年、  
青年の共働誌であるなんて、世代論は通用しない。

(莫空人)

☆コンピュータが大統領になる日

僕達はどんな行動をしようと、それは予測されている。  
役人はもう、どうに死滅している。生産はようやと人間  
性を回復させるための道具としてロボットの手より取り  
上げられはじめる。天変地異のみが予測されつつも防護  
できず、いくつもの悲劇を生みだす。

きたならしい社会のつぎはスマートな社会だ。

だけど、現実にはコンピュータが大統領になろうとし  
ている時、僕達は原始復帰を求めるのか、未来社会を求  
めるのかすら明らかにしていない。それより東京独立運  
動の方が現実性があるのかな。僕はどうしよう。(山本)

誌 雜 藝 文 義 主 府 政 無

# 線 戦 色 黒

## LA ORGANO DE ANARCHISMO

吾等の自由聯合主義を徹底せしめよ！

反動的強權思想を抹殺せよ！

創刊号

定価五、〇〇〇円

「黒色戦線」復刻

黒色戦線社

Feb. 1929 nen

### CONTRE FRANCO REGIME

Nous nous déclarons ici notre protestation contre l'exécution de cinq Basques d'ETA et FRAP, le 27 septembre 1975 par Franco régime.

Nous, libertaires japonais, qui adorent la liberté et l'égalité la plus, ne pouvons pas accepter tel qu'il est la violence d'Etat. Nous pensons que l'exécution capitale de cette fois est une perfide et trahison faites à la humanité et un défi au bon sens humain.

Nous ne croyons pas que ces cinq Basques soient criminels atroces comme Francisco Franco a dénoncé calomineusement, mais au contraire. Et c'est la menace habituelle au peuple par l'Etat pour subjuguier le peuple.

Nous exprimons ici nos condoléances profondes aux ces cinq Basques courageuse avec colère contre fasciste régime et nous manifestons notre volonté d'achever la justice anarchiste.

Masatoshi YOSHIBA  
Toshikazu ETO

Yoshiharu HASHIMOTO  
Augustin S. MIURA

Ni forte protestas kontraŭ la ekzekuto al la membroj de Basko-Sendependa Movado "Patrio k Libero"(ETA) k Kontraŭfascista Patriota Fronto (FRAP), kiu okazis la 27-an de sep..

Ni, kiel la liberecanoj kiuj amas liberon k deziras egalon, ne povas akcepti la tiranecan perforton de la registaro. Tiu ĉi ekzekuto al kvin personoj estas perfido kontraŭ la volo de la homaro, kiu celas efektivi la juston, k defio kontraŭ ĝis boneco.

Ni ne rekonas ke la ekzekutitoj estas tiel malbonegaj krimuloj, kiel diras la registaro. Tiu ĉi ekzekuto estas plenumita kiel minaco al popolanoj, k por subigi ilin per terurigo k subpremo.

Ni indignas kun malĝojo pro la ekzekuto en Hispanio, k esprimas nian volon al la koncernatoj.

Japana Liberecana Grupo

J. HASHIMOTO, M. JOSIBA,  
A. MIURA, T. ETŌ

WE ARE AGAINST THE FRANCOIST REGIME

We make a protest here strongly against the execution of the people of ETA and FRAP on 27 September 1975.

As the Japanese libertarians who love Liberty and long for Equality, we can not recognize the coercive violence of any government. The execution which has been taken place is nothing but a contempt and betrayal towards the good will of human beings who want realize justice in this world.

We do not affirm criminalities of five persons as the Francoist government has suggested. On the contrary, we do affirm that the execution has been carried out to threaten and suppress the people with terror and authority.

We declare our outrage and indignation to the facist regime in Spain with sorrowful sympathies for the five departed.

M. Yoshiba, T. Eto  
Y. Hashimoto, A. S. Miura